

倭

詩

や
ま
ほ
ろ
ば
だ
よ
り

の精神史



まほろば酔客
三輪 高士 著

第1部 細部の神と情緒

『倭詩』の精神史

まほろば酔客 三輪 高士

第1部 細部の神と情緒

まほろば主人の文章は爽快なほど明瞭である。

しかし、文章の明快さと精神史の知的枠組だけが、彼の『倭詩』を作品にしたのではない。もう一つの条件は、その鋭い感受性であり、殊に芸術や文学の微妙な味に対する美的感受性である。

この颯爽とした達意のエッセイ28編を通読し、本を閉じると、頁の頭に貼った黄色いポスト・イットの量に驚く。今度は、赤いポスト・イットを頁の横に貼り、しばらく瞑目して、少考。

それから、もういちど「昇る生き方、降りる生き方」の『老子』を玩味し、「井戸茶碗顛末記」の益田鈍翁の写真に目を凝らす。



との鼎談を味わう。

本居宣長の和歌を小声で音読、岡潔御夫妻の写真をながめ、後編の森下敬一・小泉武夫両先生

机上にメモ用紙を広げ、サインペンで正三角形を3個描く。

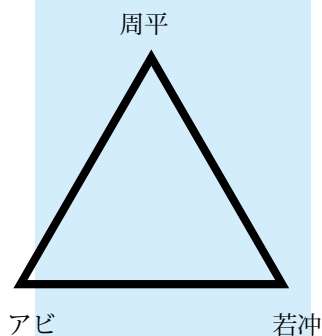
そのひとつは右下に「若冲」、左下に「アビ」、頂点に「周平」と記す。図の上に大きく「神は細部に宿る」と書く。

つぎの三角形には、同様の位置に、「宣長」「潔」「周平」、タイトルは「情緒／もののあはれ」。

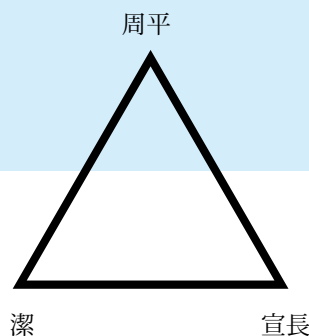
最後の三角形は逆三角形で、「敬一」「武夫」「周平」、タイトルは「醫學と発酵」。

これで終わりである。

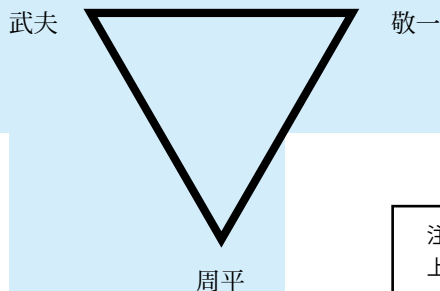
神は細部に宿る



情緒／もののあはれ

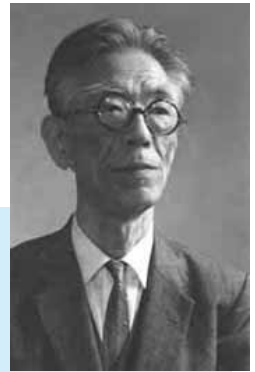


醫學と発酵



注：三角形は便宜上の平面で、三者の上下を意味するものではない。

伊藤 若冲 (いとう じゃくちゅう、正徳6年2月8日(1716年3月1日) - 寛政12年9月10日(1800年10月27日))は、近世日本の画家の一人。江戸時代中期の京にて活躍した絵師。名は汝鈞(じょきん)、字は景和(けいわ)。初めは春教(しゅんきょう)と号したという記事があるが、その使用例は見出されていない。斗米庵(とべいあん)、米斗翁(べいとおう)とも号す。写実と想像を巧みに融合させた「奇想の画家」として曾我蕭白、長沢芦雪と並び称せられる。



数学者 岡潔博士

このメモを、まほろば主人に渡せば、『倭詩』という著作の感想は一目瞭然、互いに目の奥を見て納得、了解。それでは、これから一献傾けに行きましようか、という段取りと相成る。

長い文章よりも、視覚化した図式、これほど分かりやすいものはない。『倭詩』のなかに記された、夥しい人物・写真・図版を簡潔に整理した、私個人の感懐である。

三角形のヒントは、ロマン・ヤコブソンの母音、子音の三角形である。ここから発展したレヴィ・ストロースの料理の三角形、さらに玉村豊雄さんの料理の四面体などを参照。岩波文庫の九鬼周造『「いき」の構造』の表紙絵は、「いき」を直方体で図解したものを掲載しているが、これなども大いに参考になったが簡素化とのせめぎあいがつきまとう。『倭詩の精神史・第2部 錯視と天才進化論』では、もう少しひねりを加えてみたい。

しかし、第1の三角形を未知の人に解説するのは、ひどく難しい気がする。いささか、駄弁を弄りたい。なお、三角形は便宜上の平面で、三者の上下を意味するものではない。

まず、伊藤若冲(1716-1800)。

『倭詩』173頁、まほろば主人は『老子』を短く引用する。

大盛は沖しきが若くなれども、その用は窮まらず

原文は

大盛若冲、其用不窮

「若冲」の居士号は、まさにこの『老子』第45章からとられたもので、(冲は沖の俗字)、『倭詩』に引用された文章を読めば、その向こうに伊藤若冲の精緻な絵、たとえば神技ともいえる『動植綵絵』が透けて見える。

これは、おなじ絵画でいうなら、ダリの「地中海を見つめるガラ」、あるいは気鋭の錯視画家、オクタビオ・オカンポ「ドン・キホーテの幻影」を思わせるテクニクで、文章におけるダブルイメージ。こうした仕掛けが、『倭詩』には意図的に散りばめられ、まほろば主人の文章と写真・図版が絶妙に呼応しているのである。

若冲なら畢生の大作『動植綵絵』を採りあげれば、「神は細部に宿る」という言葉の正確な意味が理解できる。アビについては、すこし説明が要

るかもしれない。

小島直記は『自叙 益田孝翁伝』の解説で、我が国の自叙伝の白眉として、福沢諭吉『福翁自伝』、河上肇『自叙伝』を挙げている。自伝なら、この3冊に波瀾万丈の前半生を綴った『高橋是清自伝』を加えてもいいだろう。

『倭詩』31頁に、鈍翁・益田孝の写真がある。



伊藤若冲『動植綵絵』

この白い顎髭をたくわえた柔和な顔は、長井実・編『自叙 益田孝翁伝』（中公文庫）の表紙に使われており、写真一葉を見るだけで、読者の連想はこの自叙伝へと誘われ、益田孝という、一代の傑物の生涯が脳裏を過ぎるはずだ。鈍翁の号は「鈍太郎」という茶器に由来する。この顛末を簡潔に記した章の、直前の文章が「明治四十年の洋行」。このなかで、鈍翁は渡独して、「ウォルボルグ」という銀行家に会ったと記す。

日露戦争の勝因は無数に存在する。そのなかで、戦費という金銭面を考慮すれば、高橋是清の存在は群を抜く。ジェイコブ・ヘンリー・シフが戦時国債を購入しなかったら、という歴史のイフは恐ろしいが、『高橋是清自伝』によれば、独逸の「ワーバーク」に宛て、電報で1億円の公債引き受けを要請している。

ところで、タイトルに掲げた「神は細部に宿る」に私が初めて接したのは、林達夫と久野収の対談『思想のドラマトルギー』（1974年）の一文だった。林は



益田孝（ますだ たかし、嘉永元年 10 月 17 日（1848 年 11 月 12 日） - 昭和 13 年（1938 年）12 月 28 日）は草創期の日本経済を動かし、三井財閥を支えた実業家である。明治維新後、世界初の総合商社・三井物産の設立に関わり、更に日本経済新聞の前身である中外物価新報を創刊した。茶人としても高名で鈍翁と号し、「千利休以来の大茶人」と称された。男爵。



高橋是清





イコノロジー (iconology) は美術史家エルヴィン・パノフスキーが提唱した概念。図像解釈学と訳される。絵画などに表された事物の意味であるイコノグラフィー (図像学) よりも深く、作品の奥底にある歴史意識、精神、文化などを研究しようとする学問である。



ドイツの美術史家ワールブルクを引用して、

「愛する神はデタイユ（細部）に宿り給う」

と久野に語っている。重ねて、林達夫は自身も「ワールブルク学派」のはしくれかも知れない、とまで言い切る。図版を多用した論考『精神史』は、その所産である。

山口昌男氏が札幌大学の学長になったとき、良い機会なのでその著書をひとわり読んでことがあった。『本の神話学』のなか、「精神史の中のワールブルク文庫」でワールブルクとパノフ

スキー、カッシーラーとの出会いを記す。つまり、図像解釈学の黎明である。

図像解釈学とは、視覚中心の、絵画の奥底にある歴史意識、精神、文化などを研究しようとする学問で、図像学より深いとされている。図像学なら日本でいえば、荒俣宏、高山宏、中野美代子といった博覧強記のひとたちが知られ、「視覚論」にまで拡がる力業は素晴らしい。江戸に限れば、

田中優子『江戸百夢―近世図像学の楽しみ』という労作もあるが、ワールブルクの提唱した図像解釈学の規模は時空をはるかに超えて広大。

木田元氏もカッシーラー『シンボル形式の哲学』の翻訳で、ワールブルクとしてゐる Aby Moritz Wadburg の表記は、ギョエテ/ゲーテのように、ややこしく揺れていたが、「アビ・モーリッツ・ヴァールブルク」で確定したようなので、以下、ヴァールブルクと記したい。

益田鈍翁が独逸で会った「ウォルボルグ」、高橋是清が打電した「ワーバーク」という銀行家はヴァールブルク一族、それも、アビの弟なのである。

林達夫（1896―1984）は、残念ながら忘れられた知識人となったが、1929年に急逝したアビ・ヴァールブルクの業績は、いま、ようやくその全貌が明らかになりつつある。

「神は細部に宿る」を誰が最初に言ったのか、には諸説あり、谷川健一氏は自著の書名にこれを採用する際、単に「泰西の学者」とだけ書いて出典を明らかにしていないが、林達夫のいうように、やはりアビ・ヴァールブルクに帰するものだろう。

アビ・モーリッツ・ヴァールブルク（1866―

1929)は、ハンブルク大学の教授を務めたドイツの美術史家。前述したように、画像解釈学(イコノロジー)の創始者として知られる。ヴァールブルク一族はロスチャイルドのような富裕な銀行家として著名、アビは、その銀行の長男で後継者だった。

先年、平凡社から『ヴァールブルク・コレクション』というシリーズが刊行され、このキャッチフレーズが、

「細部に宿った神を再び召喚するために」

私はこういう知的で洒落たものに弱く、『倭詩』同様、手も無く籠絡されてしまう。

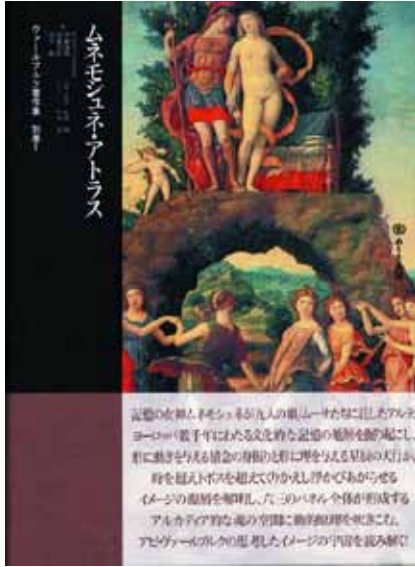
さて、『ヴァールブルク著作集』は全7巻が上梓されたあと、今年、枕のかわりになるくらい浩瀚な大著、『ムネモシュネ・アトラス』記憶の女神』が上梓された。

たいへん長い前置きになったが、『倭詩』との共通点はここにある。

『ムネモシュネ・アトラス』には63枚のパネルが配置されている。このパネルは古代から現代へと時の流れに沿って進み、これを分析／解

アビ・モーリッツ・ヴァールブルク (Aby Moritz Warburg, 1866年6月13日 - 1929年10月26日) はドイツの美術史家。1919年からハンブルク大学の教授を務めた。ハンブルクの富裕なユダヤ人銀行家の家庭に生まれ育つ。祖先はイタリアからドイツに移住したセファルディム。ボンとミュンヘンとストラスブールで考古学と美術史のほか、医学、心理学、宗教史を学ぶ。博士論文のテーマはボッティチェリの『ヴィーナスの誕生』と『プリマヴェーラ』だった。長男だったが家業の相続を嫌い、家督を弟に譲る代わりに、生家の経済的援助で好きな学問を生涯追究し続けた。フィレンツェで美術を研究する一方、1896年には米国に旅して、ホビ族に関する人類学的研究をおこなう。「蛇儀礼」がその論考である。ヨーロッパに戻り、個人的蒐集物の保存と公教育に資することを意図し、ヴァールブルク文化学図書館 (Kulturwissenschaftliche Bibliothek Warburg) を設立。鬱病と統合失調症を患い、1921年、スイスのクロイツリンゲンにあったルートヴィヒ・ビンズヴァンガーの神経科医院に入院。1924年、医師や患者仲間たちの前で高度な学術的講義をおこなうことで正気を証し、退院を許される。晩年の5年間は、ヴァールブルク文化学図書館で研究生活に没頭。精神病の再発を気遣いつつも、未完に終わった「ムネモシュネ・アトラス」への主要論文を執筆。ハンブルクで心臓病のため死去。ヴァールブルクの死後、ヴァールブルク文化学図書館は国家社会主義ドイツ労働者党の台頭を避けてイギリスロンドンに移転し、ロンドン大学附属のウォーバーク研究所 (Warburg Institute) となった。





読するためには、個々のイメージを同定し、パネ
ルの中での相互関係を解釈し、すなわちイメージ
とイメージの隣接関係を読み解かねばならない。
これは、ヨーロッパ数千年の記憶の地層を掘り起
こし、63の個々の系列をイメージによって要約し、
系列から系列へと移りゆくイメージによる思考へ
と昇華する壮大なる試みなのである。

『倭詩』も同様である。本書は、まほろば主人
の彫心鏤骨の文章、そして『ムネモシユネ・アト
ラス』のように、周到に配置された写真と図版
は古代から現代まで、日本を中心とした東アジア
の歴史をイメージとともに掘り起こし、その精神
の在り方を分析／解読したものである。そして、
過去にとどまらず、未来に向かつても提言し、創
出の力を与えようとしている希有の著作なのであ

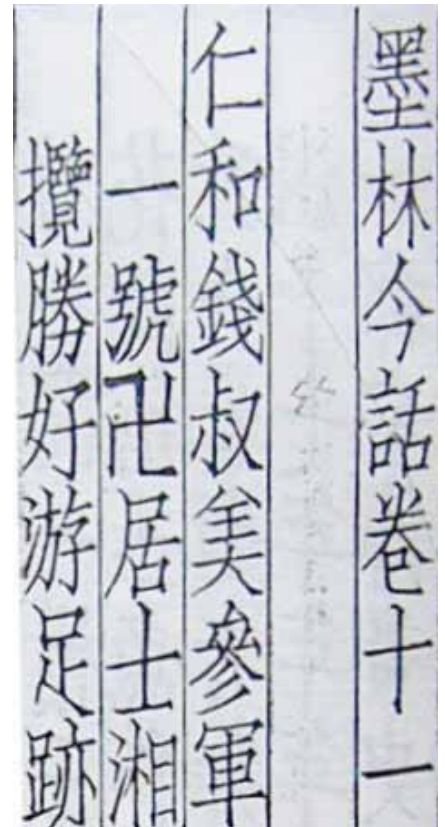
る。

さらにいえば、数千年
にわたる日本のイメージ
記憶の星座群を記した、
この書物の本文書体が
一般的な明朝体ではな
く、「宋朝体」で印刷さ
れた事にも驚倒させら
れる。

第1の三角形の底辺、アビ・ヴァールブルクと
伊藤若沖の共通点は2つある。

ひとつは、前述した「神は細部に宿る」。もう
ひとつは、両者の類例の無い生き方である。二人
とも資産家の長男、しかし家業は継がず、弟に家
督を譲っている。アビの場合は何と13歳！若沖
はむしろ消極的な隠遁ではあったが、両名、残り
の人生を、一族の大いなる財力をバックに、生活
苦は皆無、蕩尽というほどの金銭を費やして己が
世界に没頭したのである。なんととも幸福な一生。
若沖は絵に、アビ・ヴァールブルクは美術史に。
そうして、ふたりの巨人の偉業は歴史に燦然と輝
いている。

『倭詩』「日本人と情」のなかで、まほろば主人は、



宋朝体

18歳の頃、琴学を習うため上京し、牛乳配
達で自活していたと記す。アビや若沖の恵ま
れた環境に比して、何という懸隔であろうか。こ
うした境涯に天地の差がありながら、長い求道遍
歴を経て、無一物から独力で自然食品店「まほろ
ば」を創業し、エリクサーを開発し、しかも『倭
詩』に健筆を奮って「神は細部に宿る」を示した
ことは偉業としか言いようがない。

そうそう、細部の神については、近代建築史に
造詣の深い、まほろば・島田編集長から、ひとこ
とクレームがつきそうである。「神は細部に宿る」
とは、ミース・ファン・デル・ローエの言葉では
ありませんか、と。

ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ



ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe、1886年3月27日、アーヘン - 1969年8月17日、シカゴ)は、20世紀のモダニズム建築を代表する、ドイツ出身の建築家。ル・コルビュジエ、フランク・ロイド・ライトと共に、近代建築の三大巨匠と呼ばれる(ヴァルター・グロピウスを加えて、四大巨匠とみなされることも)。“Less is more.”(より少ないことは、より豊かなこと)という標語で知られ、近代主義建築のコンセプトの成立に貢献した建築家である。柱と梁によるラーメン構造の均質な構造体、その内部にあらゆる機能を許容するという意味のユニヴァーサル・スペースという概念を提示した。

(1866—1966)はドイツに生まれ、アメリカで活躍した建築家で、ル・コルビュジエ、フランク・ロイド・ライトと共に、近代建築の三大巨匠と呼ばれている。代表作に、バルセロナ・パヴィリオン、シーグラムビルなど。

まほろばとは縁は、彼の標語

Less is more. (より少ないことは、より豊かなこと)

にあるだろう。ミース・ファン・デル・ローエのこの主張は、株式会社まほろばの社是「**小國寡民**」に通じるものがある。「小國寡民」は『老子』第80章にあり、ここに、

伊藤若沖 — 『老子』 — 小國寡民 —
ミース・ファン・デル・ローエ — 細部の神

というラインが垣間見えそうだが、田中純・東大教授の『ミース・ファン・デル・ローエの戦場 — その時代と建築をめぐる』では、「神は細部に宿る」は誤ってミースの言葉とされている」と断定している。田中教授は、この著書の翌年に

『アビ・ヴァールブルク — 記憶の迷宮』を上梓しているから、島田編集長の懸念は解消されたと伝えておきましょう。

冒頭の文章に戻る。

まほろば主人の文章は爽快なほど明瞭である。

しかし、文章の明快さと精神史の知的枠組だけが、彼の『倭詩』を作品にしたのではない。もう一つの条件は、その鋭い感受性であり、殊に芸術や文学の微妙な味に対する美的感受性である。

この一文、本稿の読者は何の違和感もなく、お読みいただいたと思う。タネを明かすと、これは和辻哲郎『日本精神史研究』を解説した加藤周一の名文で、「和辻」を「まほろば主人」に、『日本精神史研究』を『倭詩』に変えたものなのだ。

まほろば主人の「芸術や文学の微妙な味に対する美的感受性」に、『倭詩』の読者は、たっぷり浸っていただけだと思う。

和辻『日本精神史研究』のなかに、『ものあはれ』について』という小論があり、本居宣



和辻哲郎



本居 宣長（もとおりのりなが、1730年6月21日（享保15年5月7日） - 1801年11月5日（享和元年9月29日））は、江戸時代の国学者・文学学者・医師。名は栄貞。通称は、はじめ弥四郎、のち健蔵。号は芝蘭、瞬庵、春庵、自宅の鈴屋（すずのや）[1]にて門人を集め講義をしたことから鈴屋大人（すずのやのうし）と呼ばれた。当時、既に解読不能に陥っていた『古事記』の解読に成功し、『古事記伝』を著した。紀州徳川家に「玉くしげ別本」の中で寛刑主義をすすめた。

「あはれ」とは、「見るもの、聞くもの、ふるゝ事に、心の感じて出る、嘆息の声」であり、さらに『石上私淑言』を引いて人生の根本を「物はかなくめゝしき実の情」に置いたこの「**実の情**」こそ、**情緒**であり、

長の思想を絶賛して曰く、
 儒教全盛の時代に、すなわち文芸を道徳と政治の手段として以上に位置づけなかった時代に、（もののおはれを文芸の本意として）、力強く彼が主張したことは、日本思想史上の画期的な出来事と言わなくてはならぬ。
 しからば、その「あはれ」とは何か、



兼好法師

折節の移り変るこそ、ものごとにあはれなれ。「もののおはれは秋こそまされ」と人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮き立つものは、春のけしきにこそあんなめれ……『倭詩』83頁に道元禅師の画像と『正法眼蔵』の引用がある。道元禅師とくれば、川端康成がノーベル賞授賞・基調講演「美しい日本の私」の中で引いた和歌が、一躍世界に広まっ

本居宣長 — 「**実の情**」 — **情緒**
 岡潔 — 宮下周平
 という第2の三角形が構築されるのである。
 『徒然草』第十九段の「もののおはれ」は、よく知られている。

た。「本来の面目」と題目があり、

人間の好時節

春は花 夏ほととぎす 秋は月

冬雪さえてすすしかりけり

との趣意一致を指摘し、更に良寛の辞世、

かたみとて何残すらむ春は花

夏時鳥 秋はもみじば

この歌は夙に仏教学者・中村元『東洋人の思惟方法』のうち『日本人の思惟方法』に引かれており、慧開えかい禅師の『無門関』第十九則、

春百花あり 秋月あり 夏涼風あり 冬雪あり

閑事の心頭に挂ることなくんば すなわちこれ

に至る。この一節は、中村元が英文で執筆した『日本思想史—中村元・英文論集』でも、まったく同文が記されて川端に先駆け、知識人のあいだに知られることとなった。

この四季の移ろいの感覚は、兼好法師の「折節の移り変ること、ものごとにあはれなれ」に通底し、「実の情」「情緒」に連結してゆく。

『倭詩』における、こうした事例を列挙すれば果てがない。アビ・ヴァールブルクが「細部の神」を通して図象イコノロジー解釈学という画期的な方法で、ヨーロッパの精神史を俯瞰したように、まほろば主人もまた『倭詩』のなかで、日本人の「まことこのころ」と「情緒」を斬新な手法で描いて、精神史をあらわした。

読者は、読みながら考え、立ち止まって記憶を辿る。たとえば芭蕉の句は115頁、144頁、237頁に引用され、233頁に河合曾良同行の



良寛

行脚図が示される。注意深くよめば、それらは互いに関連があり、広く多事に互ることを伝える意図が分かる。それで、前の頁を繰るのだが、その箇所が見つからない時は、じつにもどかしい。付箋も役にたたない。

「秘する花、顕るゝ花」では、十四世・喜多六平太の芸談が引かれる。



道元（どうげん）は、鎌倉時代初期の禅僧。日本における曹洞宗の開祖。晩年に希玄という異称も用いた。同宗旨では高祖と尊称される。諡号は、仏性伝東国師、承陽大師。一般には道元禅師と呼ばれる。徒（いたずら）に見性を追い求めず、座禅している姿そのものが仏であり、修行の中に悟りがあるという修証一等、只管打坐の禅を伝えた。『正法眼蔵』は、和辻哲郎、ハイデッガーなど西洋哲学の研究者からも注目を集めた。



芭蕉



十四世・喜多六平太

どんな立派な建物でも、決して完全無缺十二分には造らない。どこかに欠点をこしらへておく。

これは伏線だろうか。まほろば主人は『六平太藝談』を意識して、「どこかに欠点をこしらへて」いるのではあるまいか。『倭詩』を読み終えて、思い当たるのは「索引」が無いことである。人名、書名、事項これに詩歌を加えた索引があれば、読者はどんなに便利であろうかと惜しまれる。しかし、これさえも、まほろば主人にとつては「完全無缺十二分には造らない」想定内のこと、とも付度しうる。

日本の古典文学全般への深過ぎる理解と同時に、「まえがき」にある通り、青年期に慣れ親しんだ漢籍は、まほろば主人の精神に同化しているようだ。『倭詩』には、『老子』とおなじく『莊

子』も多々引かれている。莊子^ニ莊周の周は、周平を思わせ、宮下周平にルビを付せば^{エリクサ}宮下周平となるように、莊周の振り仮名が、^{ちちようのゆめ}莊周であっても不思議ではない。

大知は閑閑たり

小知は聞聞たり

『莊子・内篇齊物論第二』

「大きく打てば大きく響き、小さく打てば小さく響く」とは、坂本龍馬が勝海舟に語った、西郷南洲の印象だという。

私は、本稿で宮下周平という巨大な釣鐘を、凡骨の悲しさ、なんとも小さく打ってしまった。その響きは余りにも弱々しく、まるで蝶の羽が梵鐘を叩いたかのように聞こえる。それで、今はこんな句しか浮かばない。

釣鐘にとまりて眠る胡てふ哉

蕪村

釣鐘を叩き疲れた、この胡蝶、吟醸酒を呑みすぎて、熟睡しているのかもしれない。

いやいや、莊子は自身こそ、この胡蝶の夢なのかもしれない、と呟く。その様子を蕪村は一幅の絵にしているのだが、この話は次稿にまわそう。



蕪村



莊子（そうし、生没年は厳密には不明だが、紀元前 369 年 - 紀元前 286 年と推定されている）は、中国の戦国時代の宋国の蒙（現在の河南省商丘あるいは安徽省蒙城）に産まれた思想家で、道教の始祖の一人とされる人物である。莊周（姓=莊、名=周）。字は子休とされるが、字についての確たる根拠に乏しい。

最後に、冒頭に提示した3つの三角形を合体させ、「カニツアの三角形」を作ってみよう。

カニツアの三角形とは、イタリアの心理学者ガエタノ・カニツアが示した、描いてないはずの三角形が浮かび上がる、残像を利用した錯視である。周辺の図形とともに、白い正三角形が知覚されるが、実際には中心の三角形は物理的に存在しない。

この効果は、主観的輪郭と呼ばれる。

細部に神を宿し、情緒を追求し、醫學と発酵の新知見を披瀝し、日本人の精神史を、爽快なほど明瞭な文章で綴った『倭詩』という驚異の書が、「北の空から」世界に向けて発信されたことを、私は道産子として誇りに思い、慶賀に堪えない。

つづく

2012年残暑の9月

